

星野勤左衛門

す様、彼ら左様に訴へましても證據がございませぬければ、  
を鳥と言ひ黒めまして大概閉口させる者へでございますから  
筑城程、左様の事ならずも安心致す」と終りに双方おめし出  
しになりましたが、何しろ大家の國家に係る事でございます  
から諸役人一人も欠席なく御出ましでございまして第一は武  
州越の城主十八万石堀田筑前守正俊公、第二が御老中武州  
忍の城主十萬石阿部備中守様、第三が御老中下野宇都の宮  
の城主七萬五千石戸田山城守様、第四が御老中下野土浦九万  
五千石土屋相摸守様、第五が御老中常州鳥山の城主五万五千  
石小笠原佐渡守様、第六が御老中秋元但馬守様、第七が若  
御老中加藤越中守様、第八が御老中稻葉石見守様、第九が  
若御老中米倉丹後守様、第十が御老中本田伯耆守様、それ  
から寺社奉行戸田能登守様、同じく井上大和守様同じく永井

星野勤左衛門

伊賀守様同じく松平志摩守様、其外奏者衆、大番頭、大目附  
御目附、御小人、町奉行、以下諸役人綺羅星の如くござい  
まして、別間には御若年ながら水戸様、井伊様、玄番頭様な  
どもお扣へでございます、其日は三深長門、朝日惣右衛門同  
道で出仕いたしました、岡伊賀は當人でございまして、和  
田雷八代と相成、これに田中常右衛門附添出願いたしました  
此時御目附に於て訴狀を高く讀みあげ更に朝日惣右衛門、和  
田雷八に向ひ目附朝日惣右衛門、惣ハッ目附和田雷八、雷ハ  
ッ目、今日は双方對決御せ附けらるゝ間無禮なき様申しあげ  
ます様、雷惣、畏りましてござります……流石の雷八も訴狀を聞  
て大いに驚いて居ります、今お讀みあげの箇條一として伊賀、雷八  
右衛門にお尋ね申す、今お讀みあげの箇條一として伊賀、雷八  
身に取つて置けなし、何故かゝる虚言を恐れ多くも御公儀へ

御苦勞かけしか、先づ夫れより明白に答へせられよ。
な雷八、汝如何程蘇察張儀の辯を以て陳ずるも、先主御在
世の朝り、酒色を勸め、懸所に誘ひ、酒池に遊び、肉林に
れ、忠臣を遠け、佞人を近づけ、御領内の民に過税を負しむ
これ則ち君をして放逸となさしめ、以て邦家を奪はんとす
は此慈右衛門夙より知りたり、何んぞ覺悟のなき事あらん
や、雷八、何事の答へかと思へば、先殿の御遊興を以て
伊賀、雷八が國家を奪ふなきは、以ての外なり、よく考へ見ら
れよ、先君若し御若年の君ならば、或は伊賀、雷八が勳りによ
つてさる事なきにあらずといへども、既に御中年に渡らせ給
へば、何んぞ伊賀、雷八の勳りによつてさる事あるべき、
に忠臣を遠け、佞人を近づけるなを、更以て覺悟はささらぬ
迂活の答へ致しめさるな、慈、イヤ迂活にあらず迂活にあらず

汝等兩人老臣水谷土佐を誹して本國に去らしめ、これを大非
川に殺害せしにあらずや、これ則ち忠臣を遠け、佞人を近づ
け、以て邦家を奪はんとすなり、これを迂活の事と申すや
雷、水谷土佐が不興を受しは、土佐自ら主君をあなせり、不
禮過言に受けし罪なり、何んぞ伊賀、雷八のしる事ならんや
又途中の死は、或は洪水の爲り死せしといひ、或は流石の自
ともいひ、いづれにしても、伊賀、雷八の知るべき事なし、夫
をも雷八、伊賀の所爲とは世にいふぬれ衣、冤罪なるのみ、
抑迂活の詮義ならずや、慈、まこと兩人これをしらすば、即時此
因を糺すべかりしに、只等閑に打捨置さしは、身に覺がある
據ならずや、雷、身に覺がある事にあらずや、これを取やしく
詮義せん事他家への恥辱を思ふが故なり、他聞を傳り恐るゝ
故なり、何んぞ我等の所爲にあらんや、斯る僅少の箇條をな

星野勘左衛門

らべて、伊賀、雷八が逆心なほどは以の外の難題ならずや  
惣いふな雷八、汝等兩人君を勤めて身元弁しき賣女をおが  
なはしめ、尙忠臣水谷志摩を手打になさしむ、これ則ち罪を  
頼め正をしりぞけ以て邦家を倒さんとなすなり、これをも臣  
下の道と申すか、雷我が君の御遊興、淫にあらず邪にあらず  
天子に十二人の后あり、武將に七人、諸侯に五人、下々にも  
二人はゆるせり、況んや雲、石二ヶ國の大守に於ておや、僅  
に一人の妾を召さるゝ何んぞ邪淫の所爲といはんぞ、志摩が  
諫言其度を解せず、主君の怒りに觸れしものなり、伊賀、雷  
八の知事ならんや、惣假令其儀は運るゝにもせよ、小牧の址  
をおくら女といつはり添乳母として幼君にさし上げ、毒密な  
せしは如何なる次第か、此返答は何んと致すやよも返答は  
致されまいが」と尖とさ惣右衛門の問ひでございませすから。

星野勘左衛門

さしもの雷八も答へが出来ません……スルと雷八ホイキの筑  
前守がお進みになりまして、筑「コッヤ」兩人しばらく待て  
双方の申す所いづれも水かけ論の様で不分明であるから、先  
づ今日は下りませす様、追て双方へ沙汰に及ぶ」と其儘双方お  
下げになりました、惣右衛門、長門は不都合な調へたと口信  
しく思ひますか致し方がございません、雷八、常右衛門はヤ  
レ、危ふい所を逃れたと早々伊賀の屋敷へ遣つて参りまし  
て、雷「御家老大變でございます、伊「ナ」大變……大變とは何  
ういふ都合だ、雷「實は是れ、雷様、」でございまして何も  
彼も逐一知れた様子でございませす、何奴が言つたのでござ  
いませう、伊「フ」夫りや大變だ、一味の内には其様事はい  
ふ奴はないがコッヤ、乾度外から言つたものがあると思はるね  
雷「拙者も然う思ひます、ト」心當りがございませんよ

星野勘左衛門

伊、併しいつか深川定右衛門が何所か往つたといふが彼の  
爺ぢやあるまいか。雷、拙者も夫は思ひました。其節も申し  
ました通り小牧や十蔵が生きて居ればどうか知りませんが、  
これは殺して仕舞まして居るは定右衛門一人でございますが  
彼んなものが言つた所が深い事はございませぬよ、夫れに今  
度の願書は定右衛門の知らぬ水谷土佐の事から、其他一切の  
事が書てありますから、何うも不思議でございませぬよ、任  
事、夫れは不思議だね、何うしたものだらう、雷、何は免  
もあれ、雷、様な時は尙々御老中へ願まんければなりませんか  
ら、今度はナットお菓子を深山やらんければなりませぬと  
又々賄賂を贈つて筑前守へ頼む事でもございませう……切其後  
日を経てお呼び出しになりましたが諸役人の立合は前段同  
様でございませぬ、惣右衛門、長門は今日こそ雷八に一泡吹し

星野勘左衛門

てやらんと定右衛門、十蔵の兩人を北役所に待せ置まして  
南人出頭し及ぶ事でもございませぬ、雷八、常右衛門も何うかし  
て筑前守の助けで首尾よくいひふせて勝つてやらんと同じく  
期限をはかつて出頭し及びました、前々よりお掛りでもござい  
ますから相替らす筑前守がお出ましになりまして、筑前守家  
の家、朝日惣右衛門、惣ハツ、筑前守と和田雷八、雷ハツ  
の、今日は何度対決申し附る間無禮なき様申しあげてよから  
う二人長りましてございませぬ……雷八は前に若君毒害の事  
惣右衛門に遣り込みられて居りますから、變な事育つてわけ  
足取られてはならぬと議論を外へ轉じまして、雷、如何に惣右  
衛門、今度、伊賀、雷八に對し跡形もなき跡へを起し、上の  
御威光を以て罪なきものを罪に落さんと致すは、察する所  
伊賀、雷八が家中の者に伺せらるゝを候み、我々二人を遣り

星野勘左衛門

け御家督を逆なる主税殿に譲らんと致すのであらう、抑夫れは願逆不法の邪なるべし、何んとなれば伊賀殿は先々主の弟にして主税殿は先主の弟ならずや、伊賀殿は長者にして四十余歳なり、主税殿は壯者にして三十歳未滿ならずや、いづれの國、いかなる土地の徒を取るとも、兄を捨て弟を取り、長者を捨て壯者を取るの法やあらん、家督が主税に譲たしとて無負の難題申しかくるは抑弁劣の手段ならずや、早く願書を願ひ下げるがよからう、惣黙止留八、汝の心の弁劣に説くべし、此意右衛門を弁劣と思ふか、抑岡伊賀なるものは先々主武公の落胤と申すも、下主腹にして胎内の儘家老岡近江に買はれ、臣下の家に生れしものなり、現に先主の弟たる主税殿をさし置き、何んぞ臣の家に育し者を以て家督を継す可きや、又此度惣右衛門出府の次第は斯る争ふべからざる事、以てあら

星野勘左衛門

ず、善を善とし悪を悪とし、理非曲直を天下の公目鏡を以て分たれんため、汝等二人を相人取り、箇條の罪科を犯すものなり、汝今更いひわけに苦しみ、誠諭を家督の御心に移すは弁世とやいはん、東弁とやいはん、ア逆に若君を害せし次第をいはすや、但し返答致しかねるは全く罪に伏すと申すか、置黙止惣右衛門、若君の死去は壽命なり、添乳母の死は病なり、天壽の死と、病の死を伊賀、留八が毒殺となすともこれを糺すに典醫より、これを調ふるに立合あり、正しく天壽と病死なりしをみだりに毒殺など、申すは、全く我々の權威を穢で無實の難題申すなるべし、善を善とし、悪を悪とし、理非曲直を明らかにせらるゝ天下の決断所に無實を申すは近頃もつてひらうの事なり、能く隠んで答へてよからう、惣假令跡形なしといふども證據をあげて屈伏させんが夫れでもしらすと申し候

るや 雷假令如何程證據ありども知らざる事はしらすと答へ  
ん、況んや證據のなきに於ては何に恐れて屈伏なすべき、夫  
れどもあらば此場に出さずや、惣左様望まば見せて取らせん  
と惣右衛門は諸役人にむかひまして、惣恐れながら惣右衛門  
申しあげます、伊賀、雷八罪條取調に附まして證人二人出  
の義御差し免し願度此義如何にございませうや……エムと諸  
役人いづれも筑前守が雷八をヒキにして片手打の調へで  
さいますから、今日も亦惣右衛門が敗けはせないかと御心配  
の所へ惣右衛門が右の證人の事を願ひ出しに及びましたから  
血氣の粗葉石見守様が直ぐお取りあげになりまして、石オ、  
惣右衛門の願ひ聞届けて取らず、直ぐこれへ呼び入れます様  
惣有り難うぞんじます……ソレ押へ居る兩人これへ出ます  
様二人「へー」と松野十藏、深川定右衛門が出て来るので

さいますが、一寸と一息いたしまして直ぐ歸る事にしたし  
ます

第十四回

エー讀み續きましたたる伊賀、雷八の悪事も愈よ切道に相成ま  
してございます、扱前段にも伺ひましたる如く立合の諸役人  
にかきましては何うか惣右衛門に勝してやりたい、雷八を負  
してやりたいと其所は妙なもので誰れの考へにも伊賀、雷八  
の悪い事は分つて居りますが、肝心の座頭の筑前守が雷八  
イキでございますから各々手に汗握つてお控でございませ  
が、好い盤梅に惣右衛門が證人の出庭を願ひましたから、直  
ぐ石見守様が聞届になりまして、筑前守もまさかならぬといはれ  
といふのでございますから、筑前守もまさかならぬといはれ

星野勘左衛門

ません、其所で兩人を呼入れにならますと田窪したのは松野  
十蔵、深川定右衛門の兩人でございますから驚いたのは雷八  
でございます、定右衛門は行方がしれなかつたから、何うか  
と思つて居りましたが、松野十蔵は、現に養登で殺して死體  
まで養登の體埋めたのでございますから、よもやと思つて居  
たやうが飛出したのでさしもの雷八も呆然に取られましたか  
大膽な奴ですこしも疑ぎません、雷八は主の雷八を捨てた人非  
如何なるものかと思れば、汝等兩人は主の雷八を捨てた人非  
人でないか、何國へ参り居ると思ひ居つたによく形もなさ  
事を本國の者どもへ告げおつたナ、雷八は主の雷八を捨てた人非  
此場を下がれ、此十蔵が此場を下りやア其方の都合は好いた  
うはいけねへ、此十蔵が此場を下りやア其方の都合は好いた  
らうが、こつちの都合が悪いからアアト驚くやいふ事にして

星野勘左衛門

最上駄目だから白狀しなせへ……十日、其様に白化氣たつて  
不可、伊賀どお前が明暦元年に伊賀の家で、出雲、石見を  
押便する一味徒黨の連判狀を造つた始りから、先般吉里公を  
吉原に誘つた事、老臣士佐を説いて不興を蒙らしめこれを  
大井川で五平に殺させた事、遊女瀬川を身受して下屋敷に移  
した事、下屋敷に獨居を建築させて公殿を押込隠居にした事  
若君を矢はんと井口道伯に毒薬をもらした事、小牧の母を岡  
伊賀の姫といつはつて添へ乳母にあげて若君を失つた事、財  
目相續の争ひに加賀大隅が那摩になるつて山口兵右衛門に  
ひ附けて殺させた事まで皆此十蔵が小牧の口から聞て訴人仕  
たのだから幾等争つても最上駄目だよ……ねへ、だから早  
く言つてお仕舞なせへ、雷八を罪にせんとするとも、左様な  
るまゝの虚言を申して此雷八を罪にせんとするとも、左様な

事が證據にならうや、夫れども何か、伊賀、雷八が白筆の者でも所持して申すなら兎も角も、口にまかしてならへ立る言葉は千万いふても證據にならぬは……此痴漢者めが」と一生懸命で既附けました……スルと十蔵が莞爾と笑ひまして「土ハ、、、、恐れ多くも天下の決闘所へ證人である十蔵だ證據がなくて空言、虚言は言やア仕ねへよ、確乎な證據は此白筆の連判状だ」と雷八の目の前へ突付けました、驚いたのは雷八でございませぬ、雷八の目が出て来るとはそんなじませぬから「ハッ」と驚いて取らんと致しますが十蔵は中々遊しませぬ土、チア何うだこれでもしらぬか、燈はねへか、たつてしらぬと言やア此場で一々讀立て様か、雷、チ夫れは、土但し其直ぐに白状するか、雷、チア、土、チア二人、チア、チアと動きの取れぬ連判状で責附られましたから、さしもの雷八も

「ウッ」と結りました……スルと石見守様がお進みになりますして、石雷八これへ出よ、雷、チ、石、ウ、チ、不届の奴である、岡伊賀と心を合はせ、國家を奪ひ、主家を盗んと忠臣のもの命を取らせ剩さへ、勿体なくも坊君を毒害せしに違ひあるまい、何うじや真直に申し立よ、雷、チ、恐れ入りました、石、チ、恐れ入つた……恐れ入つたでは分らぬ毒害せしに違ひないのか、雷、毒害致しましたに相違ござりませぬ、石、何願書に認めし數ヶ條の罪條ものこらす兩人の所爲と申すか、雷、仰の通りとござります、石、一度ならず二度三度、天下の役人に手敷をかけるのみならず上をたばかる不届もの……ソレ此罪人に繩をかけよ……「ハッ」と鶴の一聲に下役人がハッ、と来て雷八の上下を脱せ直ぐ高手小手にいませしめしたから今となつては雷八も致し方がございませぬ、尤も田中常右



門 衛 左 勤 野 壘

衛門も一味徒黨の内できいすからこれも同様いしりを  
受けまして全く悪人罪に伏せましたから惣右衛門は両眼に  
を浮りて石見守様に向ひ惣朝日惣右衛門恐れながら申し  
げます、各御列席のお取り調べをもちまして悪人雷八の罪に  
伏せしますから、何卒廻尾家跡目相續の義は廻尾主税へ仰付  
下されん事、一偏にねがひあげたてまつります、石其事は各  
御列席の協議の上追て沙汰に及ぶ事であるが、其方も無満足  
ならん予に於ても始めより善悪邪正は知り居りしといへども  
やゝもすれば悪人上の威を借つて事を左右に致すによつて斯  
く今日まで延引致せしが、今日は無満足であらう」と夫れど  
なく筑前守の事を一本まいらしましたから只さへ雷八がまけ  
てよつとしてゐられる筑前守が立腹せられたりして、筑前は  
稻葉氏には異なる事を申さるゝものかな、我れ等將軍家のお目

門 衛 左 勤 野 壘

鏡をもつて六十余州の政道を預るといへども未だ依怙の沙汰  
なき致し申さぬ、夫れに何んぞや人の胸中見知らぬは依怙の  
沙汰なりといはぬばかりにいはるゝは此筑前守を誹りめさる  
か、石這は異なる事がお氣に障りました、素より我等とても  
人の胸中の見ゆるはずはなけれど、天下の政道を預るものは  
人の胸中は申すに及ばず、東國西國、四夷、八蠻の角々ま  
で掌を見るが如くなさざれば政道に私しありと思ひ候へば只  
其事を申したるのみ、敢へて貴殿を誹しにあらすかならず心  
におかけめさるゝと口では奇麗にいふて居られますが何ん  
となく心の内に解け合ぬ所が出来ました……所へ折も折りと  
遅ればせに御出席なりましたが板倉内膳正様でございまして  
既に雷八の羅にかゝり居るを御覽遊ばしませて、板罪人雷八  
此矢の根は見覺へ居るか……よも見忘れは致すまいの」と雷

星野勸左衛門

八の前へ矢の根をお我になりまし... 承知でございませう、日光御社参の御り根倉さんの駕の中へ  
打込だ矢の根でございまして雷八が見て悔りするより筑前守  
が見て悔りしました、其所で筑前守の思はれますには、若  
し此事が露顯に及ぶ様では逆も此場に居られぬ始末だからい  
つそ遺恨のある石見守を殺して死んでやらん」と、雷八は風  
でございませう、不意に石見守目かけて斬つてかゝられました  
石見守もかねて筑前守を憎く思つて居られますから、石我が  
家名を捨てても天下のためには、綱の根を断つてやらん」と、これ  
同しく行なり差添へ扱て筑前守の脇腹を一ト突突れました、  
此の腹に雷八も惣身の力をあつめていましめの繩をバツツと  
打ち切り目附生駒三郎右衛門の刀を取つて惣右衛門に斬り附  
ける事でもございませうから、「ソレ狂籍もの」と目附お小人が上

星野勸左衛門

へを下への混雑でございませう石見守は筑前守を十分お仕止に  
なりまして其場で腹掻き切つて三十五才でお果になりました、  
實におしい方でございませう、扱和田雷八は一時繩を切つて惣  
右衛門に斬り附けました、幸ひ惣右衛門の統は輕傷でござ  
いまして彼是する内大勢の下役が雷八を取りおさへましたか  
ら、其日の懸ぎは鎮りまして更に此一條のお掛りを井伊玄蕃  
頭に仰附られましたから取めて夫々御申渡になりましては、  
罪人雷八は岡伊賀諸共堀尾家へ御下げ渡しに相成、稲草石見  
守様は場所柄をもはゞからず、上みたる役人を手にかければ、  
あつて家康政易となりまして三年の後其子息を三千石の寄  
合旗本にお召し出しになつたと申します、又筑前守は罪科多  
しといへども、御普代なり、大家なり殊に始めの内は天下に  
忠を盡された家でございませうから十八万石を九万石とせられ

星野勤左衛門

上州佐倉の郷へ國替になりました。堀尾家は一時世繼絶やし  
といふ事公になりましたから石見一國を取りあげ出雲一國を  
堀尾主税へ下さる事にになりました。堀尾伊直、和田雷入の兩人は  
生ながら地に埋られて首ばかり出して三日間晒しものに相成  
竹藪で指一本づゝ切り落され、其後逆十字架になつて悪名を  
千歳に残しました。實におそろしい天の罰と申すものでござ  
います。抜新く夫れ、結局が附きましたから深川定右衛門  
は五十石に抱へられ、三波長門、朝日惣右衛門も御加増にな  
りました。松野十蔵にも三百石のお手當でございしましたが、  
十蔵は星野勤左衛門の家來でございまして其實矢數の調へに  
参つたのでございすから三百石の扶持を辭して空内共々本  
國へ立歸り、雷入が賄賂を以て矢數を多くいはせたる事を  
左衛門へ申しましたから、勤左衛門は深く兩人の歸らざるを

星野勤左衛門

公も早く此旨成瀬準人様を以て尾張公へ申しあげますと尾張  
りしか憎つくさ奴である……併し夫れにしても今一度願ひあ  
げて雷入より上の通り矢せんければ真の弓の天下と申されん  
事である」と更に出願の上へ、一日一夜に惣矢數、登万六千  
の内八千百筋の通しで終に日の本開山弓の天下は星野勤左衛  
門の取る所となりまして今に京都三十三圓堂には其額が残つ  
てございます。又勤左衛門は右の功によつて更に三百石の御  
加増で都合千五百石になりました。星野勤左衛門一世のおはなし  
もこれで大團圓にございます

星野勤左衛門

明治卅二年十二月一日印刷  
全卅二年十二月一日發行

星野拙左衛門奧附

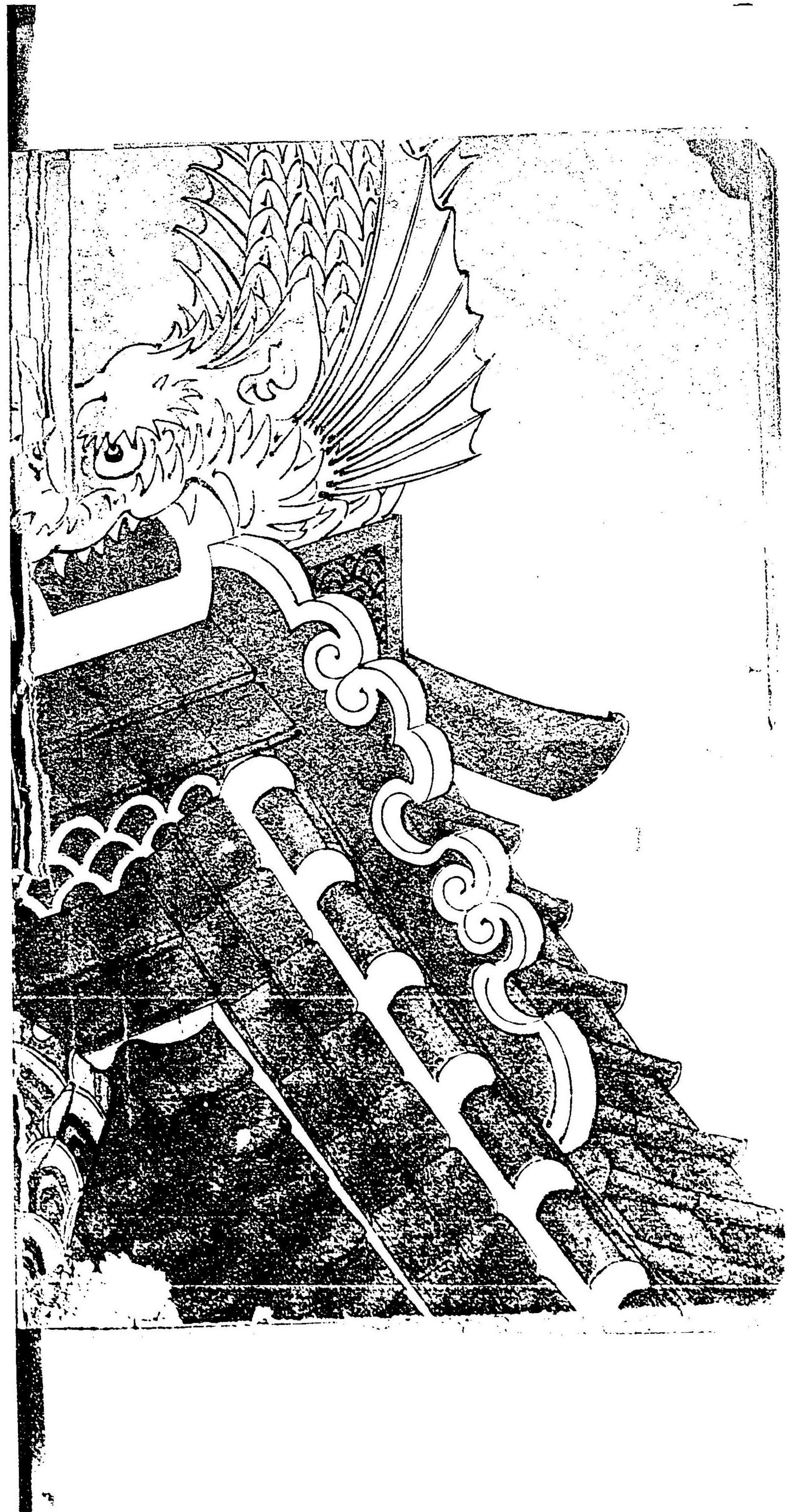
發行所 博多 久吉  
大阪市南區長堀橋二丁目七十九番邸

印刷者 井下 幸三 郎  
大阪市南區西清水町二百二十三番邸

發賣所 博多 成象堂  
大阪市南區堺筋八幡筋東南角

全 大阪市南區道頓堀黒門東二入  
大岡萬盛堂

不許複製



特 8

367

097606-000-4

特8-367

星野勘左衛門(弓の天下)

三省社 伯馬/講演

M32

DBS-1538

